これからの学校体育における一考察　―楽しい体育論を対象にして―

A Study on the Future state of School Physical Education in Japan
Focus on the Theory of Physical Education which Emphasizes Play Theories

1K05B116　　白川　由貴
指導教員　　主査　友添秀則先生　　副査　吉永武史先生

【目的】

体育において、「楽しさ」は欠くことのできない要素として確立しており、その経験の有無は子どもたちにとって、体育の価値を位置づける上で、とても重要だといえるだろう。そこで、楽しい体育論を中心に、「楽しさ」を重視した体育について明らかにし、今後の体育のあり方について検討する。本研究の目的は以下の3点である。まず、楽しい体育がどのような社会的背景から生まれ、「楽しさ」を重視した体育実践が行われるようになったかを明らかにする。次に、楽しい体育を批判的な立場で、異なる角度から考察し、問題点や課題を探る。

最後に、現代社会における教育的課題を整理し、今後の体育のあり方について検討する。

【方法】

本研究は文献購読によって行う。また、必要に応じて新聞記事などを参考に研究を行う。

【各章の概要】

〈第1章〉楽しい体育の理論的背景

戦後の学校体育の歩みを追う中で、社会情勢の変化とともに「楽しい体育」が導き出された理論的な背景たどる。体育の劇的な転換は敗戦によって急速にせまられることになり、主にアメリカの教育を受容した、民主的・経験主義的教育が展開されることになる。日本独自の教育方法を模索する竹之下休蔵は、子どもの現状を踏まえカリキュラム研究からグループ学習へと移行していく。このグループ学習は、その1つの成果として「正しい、豊かな体育学習」と位置づけられるようになり、「楽しい体育」の母体を築く。次に竹之下は、プレイ論の導入から体育の転換を図ろうと試みる。この背景には 1970 年代に急速な発展を遂げた日本において、脱産業社会がもたらす、「生涯スポーツ」という概念が存在し、人々の運動需要とともに運動に「楽しさ」をも求めるようになったことがあげられる。「楽しい体育は」このようなプレイの要素から、楽しさを求める欲求充足という、子どもの立場から追求された運動の目的的・内在的な価値や意味を持ちながら、基本的な性格を作り上げていくことになる。

〈第2章〉批判的な立場から見た楽しい体育

「楽しい体育」論は、「運動手段論から運動目的論へ、教育から学習へ、外発的動機づけから内発的動機づけへ」の転換を提唱する1つの体育論として、全国体育学習研究会によって導き出された。この「楽しい体育」論は、1977 年以降学習指導要領の改訂によって「楽しさ」を中核に置く体育として、大きな注目を浴びた。しかし、その一方で様々な批判や問題提起もなされた。そこで多く問題とされたのは「楽しさ」の持つ意味やその捉え方であった。このような、違った角度で見つめなおすことは、新しい体育論を創造する上でもとても重要なことである。「楽しい体育」論において、これらの問題の克服のために「楽しさ」を明確にし、実践に移すための具体的な論が必要とされている。

〈第3章〉学校体育の今後

現代の教育的課題にふれ、子どもたちを取り巻く環境や子どもの抱える様々な問題を取り上げ、

考察した。現代社会には、「受験戦争」、「少年犯罪」、「いじめ」という言葉に代表とされるように、子どもを取り囲む環境はとても複雑である。このような環境で子どもたちは、対人関係やコミュニケーションの問題、体力低下の問題等、心と身体の両面において問題を抱えている。そしてこのような教育的課題、社会的課題について 2008 年に告示された新学習指導要領を通して、学校体育の必要性を探る。今回の改訂では、「楽しさ」を前提とし、その経験の先の生涯スポーツへとつながる具体策が示されることとなった。「楽しい体育」を超えて、体育で行われる様々な経験が、未来へとつながるために何ができるのか。これからの学校体育の役割について述べていく。